

八、ケラニヤの聖者

昔、印度のセイロン島の南端に都した一つの国がありました。その名を、カルヤーニとよばれ、その国の王を、カルヤーニ帝須テッサと云い、その国の都に沿うて流れる河の名もカルヤーニと言われていました。カルヤーニは美しいという意味だそうです。後にはなまつてケレニヤと言われるようになりました。

セイロン島にも仏のみ法が伝わったが、この国の教団に一人の高僧があつた。実名が伝わらなかつたのでありましょう。ケラニヤに住むが故にケラニヤ僧正とよばれていました。

ケラニヤの王は厚く仏法を信じていました。日々宮廷に多くの比丘たちをよんで供養していられたが、特にケラニヤ僧正には、帰依深く、王妃と共に説法を聞き、供養せられていました。こうした平和な幸福が幾年か続きました。

しかし悪魔は、平和の裏に喰入ります。如何なる時にも処にも、秘かに毒牙をのばして、かき乱さないではおきませぬ。

王妃は年若い美しい方でありました。悪魔はそこからつけこみました。帝須王の弟によくない人がありました。その王弟は、王妃に対して恋していましたが、何時しか、二人は道ならぬささやきを交わす仲となり、破倫な逢瀬を楽しむようになりました。しかし月の夜の椰子の木陰にささやかれる甘き語らいが、何時しか王の耳に入らないではおかなかつた。

けれども心の寛い王は、そして妃に未練のある王は、嚴罰をさけ二人の間をさいて、弟を城外に放逐しただけで事をおさめました。王妃は何等の処罰を受けないで。しかし王弟は、追放されても恋の火を消すことは出来なかつた。

悪魔にみいられた王弟は、遂に一策を案じました。家来の一人を比丘に仕立てて、燃ゆる思いを認めた一通の手紙を持たせ、鉢を手にして城の門に待たせました。昼前になると、ケラニヤ僧正は何時もの通り宮城に向かわれましたが、宮廷の入り口で、一人の比丘がその後について入つて来ました。僧正の方では、王の供養を受ける比丘であろうと思われ、王の方ではケレニヤ僧正の御隨僧であろうと思われ、別に誰にも怪しまれないで一室を通り、僧正と共に丁重なる供養を受けました。沈黙の尊ばれる供養の席では、化けの皮のはがれる時はなかつた。供養もすんで、説法がありました。そうした間、密書を手渡しする機会とは与えられなかつた。説法がすんで、王と王妃は二人を見送つて玄関に出られたが、遂に艶書を手渡しする機会がない。絶体絶命、今より外はないと、静かに王妃の側によつた使いは、手紙をそつと、王妃の足もとに落としました。静かな庭である。ポテツという音は、皆の視聽をその上に集めた。王はつかつかと歩んで、その見ではならぬ艶書を拾つてしまいました。

王は室に帰つて、開いて見た。烈火のような王の怒り、宛名は王妃、差出人は、ケレニヤ僧正、しかもその中には蜜よりも甘い恋の苦しい告白のありだけが盛られてあるではありませんか。あまつさえ、その筆蹟までケラニヤ僧正のそれである。怒り憤つた王は、あわれ前後の考えもなく「おのれ、にくむべき売僧、日頃の恭敬を裏切つ

て、我が愛人に破倫の恋を寄する悪き奴、思い知らしてくれん」と、兵を精舎につかわして、僧正を捕らえました。あわれ僧正は死刑の前の一時を獄屋に投ぜられました。庭に用意された大釜には、油が煮えたぎる。

油で煮殺される極刑の前の一時、

罪なくしてこの焦熱の苦患が待つ悟か迷いか

天も黒雲におおわれ、地も悲愁に泣く。

噫、生死動乱の無明に海、

崩れたるか、失われたるか、はたまた破れるか。

見よ金剛不壊の聖座に趺坐してたじろかぬ僧正の信境

無明煩惱の黒雲を破つて燦として輝く大信仏性の光

光、僧正の腹に動いて、やがて、その全霊寂然として真如の聖火と一体

噫、聖者にとつての絶好の機会なる哉

絶対向上の大道

今や僧正は最後の試練の大関を突破して

悠々三世徹貫の大悲に悟入し、些かの不安の片雲だに影をとどめない。

彼は今、一言の弁解の辞も許されず、なそうともせず、静かに刑場に足を運び、煮

えかえる油がまの中に投ぜられる。

その時、油がまの上にあつて彼は声高らかに、偈を叫んだ。

「象王の如く歩みを運び

美しき腕、龍帝のごと

善きを喜び、徳に住したもうランカーの王よ

忿とおごりを離れて四方を得よ

すべてのものに敬われ給う慈悲のすまい

解脱のいずみ、大空のみつる日

知らるべきを知り盡し給える

上なき仏を拝みたまえ

トウ利の天界へわたせるきざはし、

輪廻の海を越ゆる船

おそれをはなるる和ぎの道

み仏の法に帰したまえ

量りなき大いなる福田

浄き心もて施せば

勝れし果報を身に受けん

み仏の讚え給う僧伽を礼したまえ

三界の迷えるもの
この三宝の光によりて
さとりを得べし
永久に三宝を崇め給え

よせてはかえす海原の波
岸辺によれが砕け散るごと
死の海にて人々は
唯、ほろびゆく

大いなる光ありとも、燈の
風に吹かれて消ゆるごと
力ありとも
死の風にほろぶ

見よ大海を衣として
地を覆い、栄華のいずみなる
美しき弁財天女も
ひとり死にゆく

老を武器として
死の神、刹那にせまる
何故のねむりぞ
なおざりを出でよ

得難き人の身を得て
悪しきを離れ
さとりにいたる道を知つて
つとめざらめや」

僧正の言々句句、唯三宝を讃嘆し、勸道の大慈悲動くのみ。噫、無我なる哉、大信なる哉、如来の威神力に乗託せるものの権威。恨みもなく、弁解もない。僧正によつて叫ばれた、この九十八首の偈が、後に「鼎カク上の偈」とよばれるものであります。（「仏国土の建設者」による）